令和２（2020）年度

自 己 点 検・評 価 報 告 書

令和３(2021)年３月

東北芸術工科大学

目　次

Ⅰ．事業編 3
はじめに 3

A　教育課程 3
A-1 学部教育 3
A-2 大学院教育 4

B　学生 4
B-1　学生の受入れ 4
B-2　学修支援 5
B-3　キャリア支援 5
B-4　学修環境の整備 6

C　教員・職員 6
C-1　職員人事給与制度 6

D　社会との連携 6
D-1 産学・地学連携活動 6
D-2 附置研究所の活動 7
D-3 全国高等学校デザイン選手権大会（デザセン）の開催 8

E　その他事業 8
E-1 こども芸術大学 8

Ⅱ．教学編 9
●芸術学部 9
〇文化財保存修復学科 9
〇歴史遺産学科 9
〇美術科 9
▼日本画コース 9
▼洋画コース 10
▼版画コース 10
▼彫刻コース 11
▼工芸コース 11
▼テキスタイルコース 12
▼総合美術コース 12
〇文芸学科 12

●デザイン工学部 13
〇プロダクトデザイン学科 13
〇建築・環境デザイン学科 13
〇グラフィックデザイン学科 14
〇映像学科 14
〇企画構想学科 15
〇コミュニティデザイン学科 15

●大学院 16

Ⅰ．事業編

はじめに

東北芸術工科大学は、教育、研究、産学官連携等の取り組みを通して、大学の本質を社会に訴求し、地域になくてはならない大学となることを目指している。令和 2（2020）年度は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、従来の大学運営や授業形態の見直しに迫られ、あらゆる事業において大幅な計画変更と新たな対応に追われる 1 年間となった。その中で、教職員が一丸となって感染拡大を留めつつ、本学ならではの授業方法を開発し、学生の満足度を下げることなく質の高い教育の維持に尽力した。

こども芸術大学認定こども園においても、園児や職員への感染対策を徹底しながら対応策を見出し、感染者を出すことなく通常の教育・保育を継続し、高い満足度を維持することができた。

A　教育課程

A-1 学部教育

A-2 大学院教育

A-1 学部教育

新学期のスタートを目前にしてコロナ禍における対応に迫られ、実施可能な授業の在り方を模索した結果、前期開講の全授業をオンラインにて実施することを 4 月 9 日に決定した。授業開始を 5 月中旬と定め、それまでの約 1 か月で演習や実習が多い本学におけるオンラインでの授業方法を教職協働で設計した。

オンラインによる授業の評価を行うため、従来は学期末に実施している「授業改善アンケート」を授業開始３週目に「オンライン授業初期段階アンケート」として学生・教員の双方に対して実施し、不安や不満を解消すべくきめ細かなフィードバックを行った。結果として、前期末に実施した「授業改善アンケート」においては、全学の平均評価点が前年度結果を上回り、オンラインにおいても教育の質を維持向上させることができた。

後期からは、感染対策を徹底することで演習を中心に対面授業を再開し、オンライン授業と並行しての授業運営を展開した。後期末に実施した「授業改善アンケート」においても全学の平均評価点が前年度平均を上回り、学生の評価を得られた。学内での感染者の発生を防ぎつつ、より満足度の高い授業が提供できた。

10 月には地元産業界から本学の取組みについて意見･評価を受けることで、教育や研究、人材育成、地域貢献の更なる向上を図るとともに、社会に役立つ大学づくりを推進する「地学連携懇話会」を開催した。本学と連携協定を結んでいる「山形新聞社」「山形銀行」「ヤマガタデザイン」の３社の担当者と、芸術学部長、デザイン工学部長、基盤教育研究センター長、就職部長とが意見交換を行った。先行き不透明な時代にあって、「課題がどこにあり、その解決のためにどのようなプロセスをたどったのか説明できる人材の育成」が求められているとの認識で一致した。本学に対しては、即戦力のみならず、「将来的に力が発揮できる」人材の育成に対する期待が寄せられた。

2 月に開催した卒業／修了研究・制作展では、「かえる卒展」をテーマとして行った。これまでの会場での展示に加えてオンラインにて配信を行う「変える卒展」として、またイ

ンターネットで作品を購入できる「買える卒展」として進化させ、来場者数に制限を設けながらも高い評価を得て、新たな卒展の可能性を見出すきっかけになった。

A-2 大学院教育

大学院授業においても対面とオンラインを併用し実施したが、個人の研究・制作活動が中心となる大学院生については、第１次緊急事態宣言の解除を経て学部生に先行して学内施設の利用を認めた。

コロナウイルス感染症対策のため、フィールドワーク研究活動や展示活動などの多くは中止となったが、全研究領域の学生が集まり、レジュメを書き上げ、展覧会・学会形式で中間発表を行う本学大学院の特色でもある「大学院レビュー」（年２回実施）は、コロナ禍によりオンラインに切り替えて実施した。その結果、「論理的にわかりやすく伝えること」をより発表者に意識させることができ、好影響をもたらした。また、授業のオンライン化により、デザイン工学専攻の一部のオンライン授業を学部生にも聴講可能とすることで、大学院進学希望の動機付けを図った。

B　学生

B-1　学生の受入れ
B-2　学修支援
B-3　キャリア支援
B-4　学修環境の整備

B-1　学生の受入れ

令和２（2020）年度より、国が主導する大規模な大学入試制度改革の実施に伴い、本学でも新入試制度での運用を開始した。併せてWeb出願システムを整備し、受験生や保護者、高校教員の出願手続きでの負担を減らして出願を促進し、トラブルなく試験を実施している。

また、オープンキャンパスや総合型選抜入学試験［専願型］（旧AO入試）では、新型コロナウイルスの感染防止対策が必要となり急遽オンラインでの実施に切り替えるなど、短期間での実施方法の見直しが求められたが、その後の入学試験については感染防止対策を十分に考え、マニュアルも整備したうえで、当初予定していた試験会場において滞りなく実施した。

学生募集活動ではコロナ禍により高校生との接触機会が激減したが、ホームページにおける本学の魅力を伝えるための入試コンテンツの見直しや、人数を限定した見学イベントの実施など、工夫を重ね対応にあたった。

令和３（2021）年度入試結果は、最も重要な入試である総合型選抜入学試験［専願型］（旧AO入試）では451名の出願（昨年比93.3%）で、そのほか、前述の通り今年度からの入試制度の変更に伴い総出願者数は2,317名となった。なお、入学定員593名に対し、597名の新入生を受け入れ、入学定員充足率は100.6%を達成し、私立大学の３割以上が定員割れを起こすなか引き続き堅調に入学者を獲得できている。

B-2　学修支援

多様な学生が就学上の障壁を取り除き、学業に専念できるような学生生活支援を実施している中、コロナ禍による精神的不安を抱える学生が増加したことにより、更なる支援が必要となった。学生支援ワーキンググループにより支援体制の整備を進めつつ、学科教員による学生面談や、学生相談室の臨床心理士による学生相談においても対面とオンライン双方による対応にて学生支援に臨んだ。

コロナ禍における経済的支援として、下記の取り組みを行った。

① 修学支援に向けた授業料の一部返金

学生が在宅での学修に活用できるよう、授業料のうち施設使用料相当額を「リモート授業」に対応するための在宅学修支援金として 2,376 人に対し総額 76,004 千円（学生 1 人当たり約 30 千円）を返金した。財源は、事業の見直しや経費の削減などを通じて充当した。

② 緊急短期貸付制度の新設

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、世帯収入又はアルバイト収入の減少により大学での学修の継続が困難になっている学生を対象に、緊急支援措置として無利子による短期貸付制度を新設した。当該制度には 2 名の学生から申請があり、次のとおり貸付を行った。

ⅰ）対象学生：東北芸術工科大学　学部生・大学院生（休学者を除く）

ⅱ）貸付額：10 万円

③ 新型コロナウイルス感染症拡大に伴う学費減免制度の新設

新型コロナウイルス感染症の影響により家計が急変し、経済的に修学困難となった学生を対象に、経済的な理由で学びを諦めることのないよう、学生支援策の一環として大学独自の学費減免制度を新設し、2 名の学生の減免を実施した。

ⅰ）対象となる授業料：令和 2 年度後期授業料

ⅱ）減免額：20 万円

ⅲ）採用人数：15 人以内

B-3　キャリア支援

前年度末からのコロナ禍の影響を受け企業説明会などのイベントが中止になるなど、採用に直結する活動が制限された。就職未内定学生の就職活動に対する不安や悩みを解消し、活動を活発化させるため、前期には「Web による就活対策講座の開催」「就活悩み相談室の設置」「学内合同企業説明会の開催」の施策を講じた。後期には年度内に内定可能性のある学生を抽出し、進捗度を学科教員とキャリアセンター職員が共有し、個別に内定獲得に向けた具体的な指導を行うとともに、大学後援会企業の求人情報を定期的に収集し、面接会を学内にて開催するなど、積極的に企業と学生の接点づくりを行った。また、学内に「就活・Web 面接用スペース」を確保し、学生が集中して Web 面接が受けられるような環境を整備した。

結果、8月末時点で50.3%（前年同日比-20.6ポイント）であった全学の就職率は、5月1日時点で88.7%（前年同日比-0.8ポイント）まで改善された。

B-4　学修環境の整備

学生が快適かつ安全に学生生活を送るため、情報インフラ整備を含めた以下の施設改修工事や修繕等を実施した。

（１）池（北側）・滝などの各配管設備・防水改修工事
（２）本館キュービクル電源盤更新工事
（３）新実習棟C（漆）・こども芸術大学劇場の空調改修工事
（４）学内無線LAN環境の更新。リモート授業に移行したことにより急遽、双方向通信アプリ「Zoom」を導入し、現在の最大帯域である10Gbps回線を敷設。
（５）防犯カメラの設置（本館・学生会館・図書館）

C　教員・職員

C-1　職員人事給与制度

事務組織の生産性の向上と職員の育成を目的として令和元（2019）年6月から導入した「職員人事給与制度」は、1年間の仮配置運用を経て令和2（2020）年6月に本配置を行い正式な運用を開始した。また、これに続いて令和2（2020）年度は食育推進室職員（学食スタッフ）及びこども芸術大学認定こども園保育教諭にかかる人事給与制度の改革を実施した。

食育推進室職員にかかる制度については事務局職員と同様に「役割等級制度」を軸とした「育成」「評価」「処遇」の各制度を体系的に整備し、6月から仮配置運用を開始し、令和3（2021）年6月に本配置を行う予定である。

職員の育成制度であるSD研修制度については、コロナ禍の影響によりすべてオンラインによる参加形態に変更となったものの、当初の計画どおり研修対象者全員が受講した。受講成果については受講者が各部署内にて報告を行うことで、本人に限らずより広く共有するように努めた。

教員については平成24（2012）年度から導入している「教員ポートフォリオ」による業績評価制度を運用しながら、令和5（2023）年度からスタートする新カリキュラムに対応した評価制度の在り方について検討会を組織し、見直しの作業を開始した。検討会は若手教員を中心としたメンバーで構成し、専任教員の職務体系の再編成、学科長・コース長の評価の在り方並びに組織（学科・コース）評価の在り方などを議題として制度設計を進めている。

D　社会との連携

D-1 産学・地学連携活動
D-2 附置研究所の活動
D-3 全国高等学校デザイン選手権大会（デザセン）

D-1 産学・地学連携活動

【協定締結企業との連携】

株式会社 IHI との連携事業では、コロナ禍の影響により、学生参加型のデザイン思考による新しいサービスや製品提案のワークショップは実施できなかったが、同社からの受託事業として、広報誌『IHI 技法』の表紙デザイン制作、ホームページデザイン制作及び開発品イメージ動画デザイン制作などに学生が参画した。また、同社と本学が共同で設置した I-ToLab. において発案された、「高等学校における AI 部」構想が具現化し、自治体や経済同友会の支援のもと県内 11 の高等学校で創部された。

【高大連携事業の推進】

本学のデザイン思考のノウハウを活用した探究型学習研究大会も、オンライン形式に変更しての開催となった。それにより参加可能な地域が広がり遠方からの参加者も増加した。高校教諭を中心に 200 名を超える参加があり、そのうち約 150 名は新規参加者であった。主要 5 教科担当の高等学校教諭が 65%を占めるなど、本学に対する美術教諭以外からのニーズも高まっている。また、山形東高、山形西高を中心にカリキュラム開発や教員研修、出張授業等による連携を継続展開した。文部科学省が進める教育改革と連動し、「デザイン思考を活用した探究型学習」の拠点化を推進した。

D-2 附置研究所の活動

【文化財保存修復研究センター】

文化財保存修復研究センターでは地域の文化財の保存修復活動を推進しており、今年度は 26 件（前年度比 124%）の契約を締結した。また、20 年計画で実施されている鶴岡市善寶寺の五百羅漢プロジェクトは 6 年目となり、鶴岡市の致道博物館創立 70 周年記念展にて修復の成果が展示されるなど、広く地域に情報発信がなされた。プロジェクトの特設ホームページを立ち上げ、修復の様子を広く動画で配信した。

また、公開講座等の外部発信イベントは、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い大半が中止となったが、3 月には山形県立博物館と共催でオンライン公開講座を開催することができ、対面での公開講座 1 回の平均参加者を大きく上回る 122 名の参加を得た。

【美術館大学センター】

第 4 回目となる山形ビエンナーレは、新たに医師でありながら芸術・文化への造形が深い稲葉俊郎氏を芸術監督に迎え、新体制により「こころ・からだ・芸術」をテーマに開催した。これまでの市街地での実施方針を改め、大学構内及び市内の特設配信スタジオを拠点としたオンライン方式での開催に転換し、約 180 名の出展・出演者により 160 を超えるプログラムを配信した。その結果、会期中のプログラム視聴者は 10 万人を超えた。

また一部を除き、閉幕後もアーカイブ公開を続けており、4 月末現在で約 18.2 万人の視聴者数を数え、地域と時間枠を超えた新しい芸術祭の在り方を提示することができた。

【共創デザイン室】

共創デザイン室を窓口とした産学連携事業においては、イベントの企画・運営に関する案件や学生によるフィールドワークの展開が必要な受託案件については実施が困難である

ため減少したものの、全体としては 48 件（前年度比 72%）の受託研究契約を締結した。また、教育的波及効果を高めるために、学科横断型の協働プロジェクトも積極的に展開した。

D-3 全国高等学校デザイン選手権大会（デザセン）の開催

令和２（2020）年度は新型コロナウイルスの影響により開催を見送った。

令和３（2021）年度へ向けて応募要項をリニューアルし、その内容について高校教諭へ評価アンケートを実施した結果、高評価を得ることができたことから、次年度募集に向けての足がかりとなった。

E　その他事業

E-1 こども芸術大学

平成 29（2017）年度に認定こども園として再スタートし 4 年目を迎え、定員 76 名の園児数に対して 74 名の在籍数となった。全国的に保育者の不足が継続する状況において、長くやりがいをもって働くことができる職員の育成を目的に、給与体系や評価方法を明示し、こども芸術大学人事給与制度の運用を開始した。年度の当初から新型コロナウイルスの感染対策により保護者に対して通園の自粛を呼びかけ、家庭教育の協力を募った。全園児の通園が可能となった 6 月以降、感染防止策を打ち出し、飲食の方法、保護者の送迎や連絡方法、行事予定などを見直した。その結果、コロナウイルスのみならず、インフルエンザや他の流行疾患も例年より減少した。

保護者が参加する行事等は減少したものの、園での様子は ICT を活用し保護者に伝えるなどの工夫を重ね、年度末の園評価アンケート調査では、昨年度に引き続き「満足」の意見が 9 割を超えた。

Ⅱ．教学編

●芸術学部

○文化財保存修復学科

＜進路＞

学部目標値は毎年達成している。学生は理想的な進路を挙げている一方で、SPI 対策、一般教養試験対策など自身の不足能力を補う努力が不足している。

各ゼミの指導で、3 年生の 12 月までに具体的な進路を明確にさせ、11 月の学内企業説明会へは全員参加させる。3 月 1 日のエントリー開始に遅れないよう準備を指導する。コロナ禍の中での就活に遅れないようキャリアセンターとの連携を強固にし、与える情報から『動く』ための情報にしていく。

ゼミ内における、担当教員が責任をもって指導するともに、情報は常に学科内で教習する。遅れることが予測できるに対しては早くからキャリアセンターと対策を検討する。

＜教育＞

本学の特徴である文化財保存修復研究センターとの連携により、実際の文化財を教材とした指導が可能となっていた。これまで 4 年生の卒業研究は、他大学と比較してもレベルが高いものとなっている。学生の能力の多様性については、カリキュラムや課題の設定で対応が不足している可能性がある。

＜学生募集＞

今年度実施した 2021 年度 AO 入試では、25 名が志願し、前年度より増加した。この入試において、ある程度の入学者を選抜することができたので、今後 25 名という数値を維持できるようにしたい。一般の高校生には分野の認知度が低いままである。

学科や文化財保存修復研究センターとの連携をホームページやブログ等でも強化して発信する。特に動画の配信を増やして、専門的な内容を親しみやすく紹介していきたい。

○歴史遺産学科

＜進路＞

GPA2 未満の学生への個別指導とキャリアセンターの積極的利用。就活先企業のミスマッチを減らし、早期内定を 1 つ取る。卒業生の就職企業との連携プログラムの創出を図る。

＜教育＞

基礎学力アップへの取り組みと受け取る力の向上による知る喜びを想起させる授業構成。ビジュアル・アウトプット、伝える力の高度な実践。基礎演習をリベラルアーツ型演習へ。

＜学生募集＞

基礎学力の高い、問題意識を有した高校生の取り込み方の工夫が必要。フィールドワーク授業や成果品についての発信力（SNS や学科の学術的催し）が不足している。

○美術科

▼日本画コース

＜進路＞

3 年後期からの進路指導の設計を見直し、今一度共有する。学年全体での情報共有や雑談も含む就職支援に力を入れつつ、ゼミを超えた教員による面談などを行っていくなど、

早期からゼミを超えコース内教員全体で取り組む。引き続きアーカイブ化した進路情報を通し、キャリアセンターと連携して個々の現状を踏まえた個別の進路指導を行っていく。
＜教育＞
　カリキュラムツリーの内容と進路決定への道筋を丁寧に示す。授業内容のねらいの周知と、その到達度についての丁寧なフィードバックを行う。社会と繋がることを前提とした演習授業は整いつつあるが、さらにリモート授業とのハイブリッド化を進める。「社会と繋がること」がなぜ必要なのかの丁寧なレクチャーを行い、日本画の技術習得、作品制作を充実させる。演習の中にコンピテンシーが身に付く、または高まるような仕組みをより一層取り入れていく必要がある。（課題発見力、計画立案力、実践力など）
＜学生募集＞
　コロナ禍により高校、予備校訪問がかなわない中、コース内目標数以上の専願型受験者を集めることが出来たが、未だ頻繁に移動が出来ない状況にあるため、現在運用しているSNSをさらに活用していく。学外営業に向けた重点校リストアップが不十分。独自の営業を含めた今後の学生募集活動により、できるだけ志願者を増やすことが課題。

▼洋画コース
＜進路＞
　エントリーシート作成や面接指導を強化し、学生の積極的な活動を支援していく。自分の強みや動機を自覚させ、企業や社会で何ができるかを考え積極的に行動させる。SPI・GPA・PROG の成績を基にした現実的な就職先を選択し、企業研究・リサーチを丁寧に行わせる。教員希望者は、教職教員担当と連携し実習・試験対策を行うよう指導する。進学者に対しては、作家意識の向上を図り、ポートフォリオ作成など大学院試験対策を万全に行わせる。
＜教育＞
　初年次教育から絵画の基礎となる材料実習についての整備を行なっていく。洋画入門と洋画概論のあり方を再検討し、西洋美術史との連携を深め、絵画表現の基盤となる技術と知識の醸成を図る。
＜学生募集＞
　美術科のある高校への積極的なコンタクト。予備校への芸工大様式の周知。洋画コースのホームページでは洋画の学びが網羅され更新しているが、更に新たな授業等の動画記録を行い学びの状況を情報発信源として構築する。例として、コロナ禍の状況を考え、豊かな自然の中や青空の下での演習やワークショップを通じ山形の大地との触れ合いを紹介する動画配信など。

▼版画コース
＜進路＞
　キャリアセンターとの連携の強化しつつもSPI、PROG、GPAなどの客観的データを参考にしながら個々の資質を探り、ミスマッチのない志望先を明確にさせ早期の行動開始に結び付ける。大学院進学希望者への制作指導の強化、意識向上を計る。
＜教育＞

大学の学修が将来とどう結びつくかを考えさせながら行っている初年次教育の実施。「ドローイング演習」で行う自己開示とプレゼンテーションで培う客観性と課題の設定。洋画コースとの共同授業において、幅広い表現を自ら選択し学修する。「美術と実践力」と演習の連携により、進級制作展において展覧会を企画展示し作品を発信する。紙漉きによる素材研究と技法との関係の強化。「キャリアマネジメント」「アーティストマネジメント」と連動し、自身の進路に結びつける。文芸学科との「画文集制作」による他者を理解した作品制作と、製本作業による版画の製品化。

＜学生募集＞

コースの認知度がまだ低く、アピールし得る高校のリストアップと訪問のシステムが構築されていない。

▼彫刻コース

＜進路＞

就活難化に対応したイベントまたは学科独自のイベントを実施したり、留学支援のための具体的情報（語学留学やワーホリの制度など）を提供していく。また、キャリアセンターと相談し学科での合同説明会等を企画する

＜教育＞

前期のフルリモートでは実技面を簡略化し、知識・思考面に重点を置いた授業内容とした。ジャーナルによって制作学修を振り返る習慣を作った（前期は毎日、後期は週 1 日）。後期は対面に週 1 日のリモートを織り交ぜて実施。リモートでの実技指導は困難なため、実技の比重を軽くしてレクチャーやプレゼンの機会を増やしている。制作期間が短くなるため実感が得難い。講義科目受講について自宅リモートを原則としていることもあり、演習時間外にアトリエで制作をしている学生が大幅に減っている（演習の時間外学修が確保されない）。

＜学生募集＞

高校生および高校教員との接触の方法と機会を模索するとともに、オンラインで彫刻の魅力を伝えるワークショップや講義などのコンテンツを提供していく。

▼工芸コース

＜進路＞

ゼミ対応のみから他ゼミ教員によるサポートも行う。3 年後期には進路を明確にさせる（進学、就職など）進路に関係なくインターンシップへの参加を義務化。ゼミ対応を後期からスタート（昨年は 12 月より）。

＜教育＞

単年度ではなく継続して行うことが出来ているプロジェクトも出てきている。授業化を目指し地域連携、他学科と連携。

＜学生募集＞

工芸分野と高校生が出会うきっかけが無い。コース内教員の学外広報経験不足もあり、勉強会が必要。

▼テキスタイルコース

＜進路＞

地場産業との交流、ゼミの活用。早期決定を見越したゼミ教員によるサポート。オンライン採用対策の意識付け。3 年後期には進路を明確にさせる（進学、就職など）進路に関係なくインターンシップへの参加を義務化。ゼミ対応を後期開始からスタート（昨年は 12 月より）。オンライン採用対策の意識付け。県内企業のコース独自の会社説明会の開催。

＜教育＞

プロジェクトを行うためにゆとりを持たせていた演習において、成果物としての習得技法や表現方法を増やし、学生が「できるようになったこと」を実感しやすくする。その中で地場産業に通じる演習も実施し、わかりやすい体感を増やすことにより学生自身が主体的に考えられる部分を確保でき、多様なテキスタイル分野の本質を見つけやすいようにする。今まで以上に充実した内容の演習を実施する。

＜学生募集＞

充実しているとは言い難い。よりカリキュラムの内容や、ここでの学びの特徴、その結果としての進路や成果物としての作品や活動について SNS などを含めた広報活動を強化する必要がある。現在は SNS において、実験的に導入している演習内容を中心に発信している。

▼総合美術コース

＜進路＞

前期は就職に関してはかなり苦戦をしたが、後半は徐々に内定者が増え昨年と同率の内定率となった。これは後期になり、対面での授業等が始まり、就職指導だけではなく、授業前の日常的な会話の中での就職の話や学生間の情報交換など、コース全体で就職活動をする空気みたいなものが作れたのがよかったと思われる。

＜教育＞

今期から新任教員が加わり、昨年から取り組んでいるワークショップのプロの養成というコースビジョンに沿ったカリキュラムについて話し合っており、その移行期間として一部の授業は今年から実践している。2022 年の改変に向けた準備を始めている。具体的には、社会に対して企画や提案だけではなく、それに加えてワークショップやプロジェクトなどを実際に起こすことのできる実践力を持つ学生の育成を考え、造形やワークショップの授業の割合を増やしている。

＜学生募集＞

総合美術コースは、コース名だけで何を学ぶのか想像することは難しいため、今年からコース独自の H P を制作し、わかりやすく伝えるような仕組みを作っている。オープンキャンパス参加者や総合型選抜入試[専願型]受験者はこれをしっかりと見ていて、コースの学びをしっかりと理解していると感じるため、一定の効果はあると考えられるが、目標達成には HP に訪れる人数をふやす必要がある。

〇文芸学科

＜進路＞
　書類は通るが、面接で失敗するケースが多い。プレゼン能力の教育が不足しているため、面接に特化した就活指導を行う。また、授業「社会研究」「セルフポートレート」にプレゼン能力を培うプログラムを入れ込む。
＜教育＞
　「言語表現力」を身に付けさせる。「言語表現力」とは、言語の力と限界を正確に理解し、それによって新たな価値を発見し（思考力／想像力）、自己と世界をつなげ（創造力／社会性）、人と人、人と世界をつなげ（創造力／社会性）、豊かに＝主体的に生きていく力の総称である。
　「言語表現力」の中でも、とりわけ自分の考え・アイディアを他者に臆せずに伝えられるアウトプット能力を強化する。（アウトプット能力は、通俗的には「積極性」と言い換えられる）
＜学生募集＞
　東北、北関東を中心に、文芸部のある高校にパンフ、ハンドブック、「文芸ラジオ」等を郵送する。山形、宮城を固めつつ、北関東をターゲットに新規開発したい（2021 年の 1 月に送付予定）。また文科省の通達により高校の国語の授業が小説よりも論説文中心になっていくので、「いかに論説文を教えるか」についての研修会（高校の先生が参加するような）を開催したい。

●デザイン工学部
〇プロダクトデザイン学科
＜進路＞
　UIUX, CMF デザインに加えリサーチ職など幅広く専門職へ人材を送り出すことができている。優良企業への進路実績は引き続き学内 No1。この数値および内容を 2021 年度も継続していく。
＜教育＞
　UIUX 演習の強化ははかっているが、学生はポートフォリオへの展開ができていないなど課題も残る。クラフトはコース選択する学生は増えてきているがまだ試行錯誤の段階。より明確な位置づけが必要であり、地域産業コースとし、地域貢献を目的としたデジタルと手仕事を融合した授業にしていく。
＜学生募集＞
　今年度の総合型選抜試験【専願型】においては、過去最高の志願者数だった。UX デザイン教育（論理、思考力、仮説構築力など）を重視、それが進路につながることをオープンキャンパスに加え、SNS などを通して発信も行った。感染症の影響で高校訪問は予定通りにはできていない。

〇建築・環境デザイン学科
＜進路＞
　コロナ禍における就職活動開始時期の遅延。就職活動レベルがアップしている現在、こまめなフォローアップと就職活動に対する早めの動機付けが必要。

＜教育＞
　地域に開かれ、社会のなかで活躍するための学力をつける、満足度の高い教育。様々な学生のレベルに応じた教育プログラムの提供。
＜学生募集＞
　オープンキャンパスでの入れ込み数の減少。広報などオープンキャンパスに行ける勧誘の仕方は、資格取得などの情報とそのフォローを行っていく。

〇グラフィックデザイン学科
＜進路＞
　3 年次時点（就活本格化前）就活に対しての意識を醸成しておく必要がある。早期から面接やグループディスカッションなどの実践的な選考（インターン等）に進むことで、早期内定、及び複数企業の内定を得られるように指導計画を練る。また進路がなかなか決まらない学生については、今後も学科で現状を見ながら教員間で密に共有し、経常的なフォローアップを行なっていく。各ゼミでの就活指導だけでなく、未内定学生に対しては的確な指導ができる教員をつけてより細やかに対応していく。
＜教育＞
　ここ数年、学生の制作意欲の低迷、自由課題苦手意識、さらに実践での経験不足により思考力低下が見られる。学生が自ら考え、想像し、行動できるような演習カリキュラムが必要とされる。一方で、卒業制作に関してはゼミでの丁寧な個人指導で現状自由度が高く、学科全体で見た時に多種多様な研究があるので、学生個人が研究したい表現については、卒制で実現出来るような指導をし、自由度とクライアントワークのバランスをとっていく。
＜学生募集＞
　更なる学科 HP の強化。受験生が少なくなることを見据えて学科のオリジナルな発想と展開が新たに必要とされる。近年 OC の来場者数・出願者が急減した学科について、入試課と連携してより正確な原因を把握した上で、打てる施策を考案。また、長年多数の卒業生を送り出してくれている高校との関係性を引き続き強化する施策も行なっていく。

〇映像学科
＜進路＞
　コロナの影響で早期募集が必至なため就活に意欲的でない、または進路を明確にできない学生を早期に把握し、2020 年度中にキャリアセンターと教員全員で指導を行った。また、早めのゼミ分け（1 月中）と、ゼミごとに早期からの進路指導（履歴書の添削と多様な業種に目を向ける）を徹底する。
＜教育＞
　作品思考中心で映像デザイン思考が理解できている学生が少ない。クォーター制の強み（多様なカリキュラム選択）が、学生に浸透しているとは言い難い。クォーター制のマイナス面として、CG、映画分野は実行出来ておらず、全体のカリキュラムとして浸透していない。作品を作ることで満足し、広報・発信する意識が弱い。
＜学生募集＞

広報委員会の活動を指導し強化する。毎週の更新を目指し、インスタグラムや Twitter で学科の活動を積極的にアピールする。学科の HP で映像学科の今を広報し、高校生が関心を持つ内容を PR する。また、出張講義でも HP を活用することによって、どの教員が対応しても学科紹介ができるようにする。

〇企画構想学科

＜進路＞

過去数年間、95%をクリアしてきたが、今年は出足が遅かったせいか到達できなかった。学科として推奨したい企業への就職をさらに進める 前期のオンラインのみの指導がネックなのか、就活から逃げる学生が少なからず存在し、 ネット検索がメインの手段という制限により、自分が知る範囲での企業選びしかできない点が改善点。

＜教育＞

他大学でも「産官学連携プロジェクト」が多く行われるようになる中、学科のプロジェクトへの取り組みが埋もれてきている。プロジェクトをやっているということだけではなく、コンセプトの違いを明確にし、どのように取り組み、どのような成果を上げているかを情報発信していく必要がある。そのために、オンラインツールを最大活用する。 「学生の主体性を育てるための新しいオンラインツールの利用の仕方」を構築の元年とする。

＜学生募集＞

AO 入試志願者数は、2018 年度 44 名、2019 年度 52 名と 2 年連続で過去最高を更新した。この数値をベンチマークとし、さらに伸ばしていくことを目指す。

〇コミュニティデザイン学科

＜進路＞

DP、CP を踏まえて、1 年次からどのような資質能力を身につければ、DP にふさわしい人材かつ、進路決定力に繋がるのかが不明確なため、キャリアデザインへの意識が低いまま、３年後期を迎えてしまい、学科が輩出したい人材像にも、本人の希望にもかなわないなりゆきの就活状況になっている。 自分の特性の理解、社会や地域の課題解決をしている職業に対しての理解、働くことで実現できる自分と地域の幸せな未来づくりへの理解を進め、地域貢献する仕事への関心意欲の醸成を行う。

＜教育＞

過去の授業、研究などのアーカイブがないために、重複チェック、関連性の提示ができていない→学生がカリキュラムの流れや学ぶべき内容が理解できていないし、教員も理解できていない。DP やカリキュラムを踏まえた上で、科目の教える内容の整理が必要であり、それぞれの科目の意味付け、重要度などを学生に伝え切れていない（環境共生型コミュニティ論）。

＜学生募集＞

高校教員とのネットワークづくり。出張授業と学科説明をセットで行う場づくり。地域との協働による高等学校改革推進事業認定校や地域探究活動に力を入れている高校に、特別版の DM を送るなど関係構築を行う。

●大学院

＜進路＞

担当教員からの情報を集約するシステムの構築が必要。学部 3 年時に大学院進学希望者にも基本的なキャリアガイダンスや企業説明会への参加を促すように依頼する。それによって院での就職活動のイメージを持たせやすい。

＜教育＞

学生の学外活動として、4 月には佐藤美術館(東京都)において、グループ展「TOHOKU CALLING」を開催した。専門領域の枠を越えた学びを通して表現者として成長した 23 作家、3 ユニットが出展し、これまでのアート作品という枠を超え、地方のデザイン集団や地域の芸術文化活動とのコラボレーションを展開した。

また、3 月に開催予定（中止）となっていた若手アーティストを中心とするアートフェア「3331ART FAIR2020」（アーツ千代田 3331・東京都）に出展するための学内公募や作品の価格設定といった準備作業を通して、アーティスト・インキュベーション活動にも取り組んだ。

＜学生募集＞

令和２（2020）年度からの入学生を対象とし、各専門領域の特質を生かした系統的なカリキュラムに再編するとともに、修士課程デザイン工学専攻では従来の地域デザイン領域を 5 つの領域に再編し、専門領域の明確化を図った。